

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月20日現在

機関番号：32509

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20500527

研究課題名（和文）日本の武道文化の成立基盤—新陰流と一刀流剣術の研究を通じて

研究課題名（英文）A Study on Establishment Factors of Budo in Japanese Culture  
—as seen in Shinkage-ryu and Itto-ryu

研究代表者

魚住 孝至（UOZUMI TAKASHI）

国際武道大学・体育学部・教授

研究者番号：70203495

研究成果の概要（和文）：

18世紀初期の新陰流と一刀流の由来の形稽古の仕様を各々の古文献に基づいて解明し、これら流派の思想を明らかにした。18世紀後半には、防具を着け竹刀で打ち合う撃剣と言われる新たな剣術のやり方が、一刀流の一派に導入された。撃剣はすぐに普及したので、伝統的な流派剣術は影が薄くなった。他方、流派剣術では、独立心と死の覚悟が武士にとっての第一義とされていたが、この精神的な見方が、日本の武道文化の根本的な教えとなり、実戦的な技術よりも人間教育が第一義と考えられているのである。

研究成果の概要（英文）：

We have logically clarified the original training forms of fencing-patterns in Shinkage-ryu and Itto-ryu through studies on old documents of these schools, and also confirmed their philosophy in the early 18th century. In the second half of this century, a new fencing style, so-called Gekken using bamboo-swords and protectors, was adapted in a branch of Itto-ryu. This fencing style was immediately so popularized that the existence of traditional Kenjutsu schools was put in its shade. On the other hand, in the traditional Kenjutsu schools, the spirits of the independence and the readiness for death were considered as the first importance for Samurai. This spiritual enlightenment became the basic doctrine of Budo culture of Japan that considers human education as primarily important rather than practical martial technics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	3,600,000	1,080,000	4,680,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：武道、剣術、流派、新陰流、一刀流

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

### 1. 研究開始当初の背景

日本の武道文化の独自性を明らかにするためには、流派が展開した近世武術のあり様から考える必要がある。近世が始まる直前には倭寇が剣術で以って中国沿岸部を襲ったこともあったので、中国では対抗する武術が工夫されていた。中国武術との比較すれば、日本の近世武術の特性が明らかになると思われる。そこで 2003 年度から所属大学の研究所で、「東アジアにおける武術の交流と展開」をテーマとしたプロジェクト研究を立ち上げた。日本・中国・朝鮮の近世社会の構造や武術の位置づけの相違を踏まえて、日本の近世武術の性格を際立てることにした。その研究結果、日本の近世武術では特に流派剣術が主導的であること、二人で行う形稽古を通じて実戦武術よりも精神性を強調することが日本独特のものであること、初期には将軍家兵法師範となる新陰流を中心に理論化がなされ、諸文献が残されているので社会への定着過程も明確に示せること、後期には竹刀で打ち合う撃剣が下級武士や郷士などから広まるが、一刀流の中西派が撃剣を導入してから本格的に普及し、19 世紀には北辰一刀流が展開して、近代剣道の母胎になることなどが明確になった。

そこで日本の武道文化の成立基盤を問題するために、まず新陰流に即して流派剣術の性格を明確に捉えるとともに、撃剣の導入とともに、流派剣術がどのように変容したのかを一刀流に即して考察することにした。2008 年度から「日本の武道文化の成立基盤—新陰流と一刀流剣術の研究を通じて」とする本研究を開始することにした。

### 2. 研究の目的

本研究は、日本の武道の特性を、その成立基盤となった近世の流派武術に遡って根本的に解明することを目的としている。16 世紀後半から 17 世紀前半にかけ、形（かた）を中心とする技術伝承の教育システムを持った流派が形成・定着する中で、多くの伝書や理論書が作成されて、単なる武術に止まらない武道と呼ばれる独自の文化が形成されてきた。流派では形の術技伝承が根本であり、伝書もそれを前提として作られているので、形の術技を解明・分析することが重要である。本研究では、流派武術でも特に主導的な役割を果たした新陰流と一刀流剣術に即して、伝承されている術技を 18 世紀初頭までの諸文献で検証して元来の形の術技を解明し、また 17 世紀半ばの『五輪書』も合わせて実戦剣術から形による流派剣術へと飛躍する原理を解明したい。18 世紀後半、防具を着け竹刀で

打ち合う撃剣が一刀流の中西派に導入されてから、19 世紀に本格的に普及し、北辰一刀流が近代剣道の母胎となることになるが、では一刀流剣術では、形の術技はどうであったのか、伝承術技と 18 世紀初頭までの諸文献を合わせて元来の形の術技を解明するとともに、中西派や北辰一刀流が撃剣を導入・展開することによって生じた変容と、明治初頭に一刀正伝を称した山岡鉄舟までの展開を見ながら、近代剣道への影響を問題にする。以上の新陰流と一刀流剣術を中心とした研究を通じて、日本の武道文化の成立基盤を明らかにすることを目的とする。

### 3. 研究の方法

(1) 新陰流・一刀流などの調査と資料収集  
流派剣術の形成過程とその実態を明らかにするために、関係地に調査に行き、出来るだけ多くの研究資料を収集する。

(2) 流派形成と社会への定着の過程の研究  
流派の形成と社会への定着過程を、陰流、新陰流、一刀流、二天一流などの研究から明確にする。

(3) 新陰流・一刀流の形の元来のやり方の推定・復元

流派の形の術技に関して、その仕様を叙述した資料を時代順に並べて文節ごとに比較検討して、伝承の仕様を参考にしながら、近世初期の元来のやり方を推定・復元する。術技的に検証して具体的に示すため、文献の叙述と照応させて復元した形の演武の分解写真を掲載する。

(4) 流派剣術に通底する修練法と思想研究  
上記で明確になった形のやり方を基にしながら、柳生宗矩『兵法家伝書』、柳生兵庫助『始終不捨書』など、流派の理論書の内容を問題にする。また宮本武蔵『五輪書』など、同時期の理論書も合わせて問題にする。

(5) 流派剣術と撃剣導入による変容の研究  
一刀流の元来の形のやり方を踏まえた上で、小野宗家が撃剣を導入した中西派に警告を与えた内容を問題にする。撃剣の導入・展開によって、一刀流伝来の形がいかに変容したのかを、千葉周作の北辰一刀流の伝書や、山岡鉄舟の一刀正伝無刀流の形のやり方と比較して考察する。

(6) 近代剣道への流派剣術の影響の解明  
北辰一刀流や一刀正伝無刀流の展開に注目しながら、近代剣道の成立過程を研究する。近代剣道には流派剣術の伝統がどのように影響したのかを問題にする。

(7) 日本の武道文化の成立基盤の研究  
上記の研究成果を踏まえた上で、剣術を主として日本の武道全体が近世から近代、現代

までいかに展開したのかの歴史を概観するとともに、中国武術や近代スポーツとの比較文化論の視座を持って、改めて日本の武道文化の成立基盤の根本性格を明らかにする。

#### 4. 研究成果

本研究は、江戸時代の武道文化の形成・展開に主導的な役割を果たした新陰流と一刀流剣術を中心に、元来の形の仕様とその思想を明らかにすることを通して、日本の武道文化の成立基盤を解明することを目指した。以下、7つの観点からまとめる。

##### (1) 新陰流・一刀流の調査と資料収集

陰流；三重県南伊勢町、新陰流；群馬県上泉、米沢市上泉家、奈良県柳生町、名古屋市柳生家、一刀流；金沢市小野家文書、無刀流；狭山市石田文庫を調査し、主要な資料をほぼ収集することができた。金沢では村上康正氏より一刀流小野家の伝書の影印本8冊と山岡鉄舟書写の影印本3冊の寄贈を受けた。

##### (2) 流派形成と社会への定着の過程の研究

上記の調査によって、陰流の愛洲移香斎の最新の研究状況を整理でき、上泉信綱研究では通説を大幅に書き換えるとともに、上泉において時代に先んじて近世剣術の基本的な考え方が確立していたことが確認できた。

##### (3) 新陰流・一刀流の形の研究

①新陰流では18世紀初頭までに勢法の仕様を叙述した6つの古文書を照合し、勢法すべての実際のやり方を推定・復元し、典拠の叙述の分節・照応させた演武の分解写真を掲載した論文を作成した。また「砕き」と言われる勢法の応用・吟味の仕方を、上述の勢法とともに3文献に基づき当時の稽古のあり様を解明した。

②一刀流の伝承術技を踏まえながら、18世紀前後の小野家伝書と津軽伝書の叙述から、「表五〇本」の形の元来の仕様を推定・復元するとともに、これが「五点」の砕きから展開した仕方も推定した。

##### (4) 流派剣術に通底する修練法と思想研究

新陰流、一刀流、二天一流のそれぞれの流派の形成と展開過程と各流派の形の研究、相互の関係などを考察するとともに、近世社会の形成期の社会状況の中で武士の教育として流派剣術が取り入れられ、武芸者も理論化と教習体系を整備していったことを論じた。

17世紀までは形は流派の基本的な原理に基づき構成されるが、実戦的に変化させ有効性を吟味して稽古するとともに、敵の太刀の下に進みその一本でいく武士の覚悟を養成することが目指されていたことが明らかになった。

##### (5) 流派剣術と撃剣導入による変容の研究

18世紀後期、下級武士や境界身分層を中心に竹刀で打ち合う撃剣が広まっていく中で、一刀流でも撃剣を受容した派が現れたが、宗

家は流派の元来の形を崩さぬよう警告した。

新陰流では撃剣は問題にされなかったが、尾張柳生家では19世紀初期に流派本来の勢法とその砕きの勢法が制定され再編成されて今日に伝わる。

##### (6) 流派剣術の近代剣道への影響の解明

19世紀初期から撃剣が剣術の主流になり、打ち合う技法に変化したが、伝来の形も稽古され武士の覚悟が強調された。19世紀末期から20世紀初期にかけて段階的に近代化されて成立した近代剣道は、撃剣による打ち合う競技となったが、流派的な形を残し剣の精神を理念として掲げている。

##### (7) 日本の武道文化の成立基盤

①時代背景・社会的な基盤：16世紀末、銃火器を使った大集団での合戦に変化する中で、個々の武士の独立不羈の精神を刀に象徴的に見出し、二人の形での稽古法の固定する中で、流派剣術が形成された。戦国を凍結し、身分制を固定化して刀が武士の身分的表徴とされる中で、集団軍事訓練が幕府に警戒される中で個々の武士の戦士としての自覚を養成するものとして、流派剣術が社会的にも導入され広がっていった。

②日本の独自の武術から文化への変容：武術の実戦性よりも精神性を強調する。生涯にわたる修行法の確立。背景としては、宗教的な真理観の世俗化の流れの上に、社会に正統イデオロギーがなく、武士社会で武術の持つ意味が高い、武士教育としての武術鍛錬、知識人の積極的な関与、御伽衆などで武術者の知識人との交流、武術の意味・思想の追求、江戸初期の社会の形成期の流動性、旧時代の武将の独立の気概、戦士としての自覚、いざという時の覚悟、合戦での荒くれた武士の精神の陶冶・馴致、殺人刀から活人剣へ、武力を文化的に懐柔、自制の美学、武装した上での自重、社会の中でノブレス・オブリージュの意識があり。社会を領導する支配層。個の独立と誇りがあった。

③流派の形成・展開：流派の独自の原理を示し、何段階かの形を制定して目録・免許を作って教習体系を整備し、技法と思想的な意味の両面で理論化も進められたが、元来は形も変化応用させて有効性が吟味されて実戦性も備えていたが、次第に武士の覚悟の養成の面が強かった。これは江戸後期の撃剣の展開期にも理念的に強調されていた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

- ① 魚住孝至「日本の武道文化の成立基盤—新陰流と一刀流剣術の研究を通じて」(『国際武道大学研究紀要』第17号 p91)

- ～103) 査読なし 2012
- ② 魚住孝至「上泉武蔵守信綱研究覚書」(国際武道大学『武道・スポーツ科学研究所年報』(以下『年報』と略記)第17号p123～138) 査読なし 2012
- ③ 吉田靱男「新陰流の砕きについての続報「二十七箇条截合」と「試合勢法」について」(『年報』第17号p104～122) 査読なし 2012
- ④ 長南信之・立木幸敏・魚住孝至「小野家伝書から見る一刀流剣術」(『年報』第16号p98～134) 査読なし 2011
- ⑤ 魚住孝至 柳生・亀山・南勢町調査報告・愛洲移香齋研究(『年報』第15号p137～148) 査読なし 2010
- ⑥ 吉田靱男「長岡房成(桃嶺)手記による新陰流「二十七箇条截合」に関する考察一本伝の砕きについて一」(『年報』第15号p119～136) 査読なし 2010
- ⑦ 吉田靱男監修 魚住孝至「新陰流勢法研究4「天狗抄」「極意之太刀」」(『年報』第14号p133～166) 査読なし 2009
- ⑧ 魚住孝至「十八世紀における武術文化の再編成—社会的背景とその影響—」(『十八世紀の日本の文化状況と国際環境』(思文閣出版)(p367～397) 査読なし 2011
- ⑨ 魚住孝至「武道の歴史とその精神 概説」(国際武道大学研究所編集『武道論集』第1集p7～40) 査読なし 2009
- ⑩ 魚住孝至「日本の武道文化の比較文化論的考察」(『武道論集』第3集p11～50) 査読なし 2012

[学会発表] (計3件)

- ① 立木幸敏「小野家伝書から見る一刀流剣術」  
(日本武道学会第44回大会; 2011年8月31日 国際武道大学)
- ② 魚住孝至「新陰流勢法研究」(日本武道学会第42回大会; 大阪大学、2009年9月4日)
- ③ 魚住孝至 特別講演「武道の比較文化論的考察」(日本武道学会第44回大会; 2011年8月31日 国際武道大学)

[図書] (計1件)

- ① 魚住孝至『宮本武蔵—「兵法の道」を生きる』(岩波新書・240頁・2008)

[その他]

ホームページ等

<http://www.budo-u.ac.jp/laboratory/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

魚住 孝至 (UOZUMI TAKASHI)

国際武道大学・体育学部・教授  
研究者番号：70203495

### (2) 研究分担者

立木 幸敏 (TATSUGI YUKITOSHI)  
国際武道大学・体育学部・准教授  
研究者番号：20255178

大保木 輝雄 (OHBOKI TERUO)  
埼玉大学・教育学部・教授  
研究者番号：80114205

### (3) 研究協力者

吉田 靱男 (YOSHIDA TOMOO)  
国際武道大学・研究所・客員研究員

仙土 克博 (SENDO KATSUHIRO)  
古流剣術研究会・会員

中嶋 哲也 (NAKAJIMA TETSUYA)  
早稲田大学・スポーツ科学院・助教

朴 周鳳 (PARK JOUBON)  
早稲田大学・スポーツ科学院・客員研究員

長南 信之 (CHONAN NOBUYUKI)  
国際武道大学・大学院・研究生